

口裂け女は、妖怪か

中尾 祐子

はじめに

筆者はかつて現代に生きる妖怪を研究するために、「口裂け女」に取り組んだ。彼女は現代の妖怪として、代表格と言つてよい知名度を確立しているからである。

ところが、実際に調べてみると扱いの難しい題材であった。本稿では、「口裂け女」を論じていく困難さを、先行研究をレビューすることで考察していきたい。

第一章 「口裂け女」のこと

大きなマスクをした赤いコートの女が、通行人を呼び止め、「わたし美人と思うか」と尋ねる。「美人や」と答えると、のこのこ家まで付いてくる。「ぶすや」と答えると、やおらマスクをはずし、耳まで裂けた口をかつ

と開いて、びっくりさせる。

〔週刊朝日〕一九七九年三月二三日号

(一) 誕生

右の引用は、比較的初期に採録された「口裂け女」である。「口裂け女」が出現したという噂は、昭和五四（一九七九）年以後に発生したと推定される。引用文の言葉遣いからも分かる通り、この噂は西日本から広まり始めた。早くは一九七九年一月二六日付の『岐阜日日新聞』に取り上げられたことから、岐阜県内に発生源を求め見る見解が多い。

以後、口裂け女は六月から七月にかけて首都圏に「上陸」し、社会現象として認識されるようになった。七月一〇日付の『朝日新聞』では、「はやりことは白書 七九年前半」という記事のなかで、「ウサギ小屋」「インベーダーゲーム」と並んで、当時の流行語として「口裂け女」も紹介されて

口裂け女は、妖怪か(中尾)

いる。

(二) 発展

初期は、上に引用した程度の単純な物語であったが、六月ごろまでには「尾ヒレ」が継ぎ足されていった。たとえば、「彼女は猛烈に足がはやい(百メートルを十二秒台、もしくは五、六秒で走る)。」や「鎌(初めは包丁)を振り上げて追っかけてくる。」などである。

また、当初、「口裂け女」は追っかけてくるだけで、殺害するか否かに関する結末まで語られなかった。しかし、答え方次第では殺される、もしくは、どのように答えても殺される成り行きが生まれた。そして、「ポマード」と三回唱える、ベッコウ飴を投げつけるなどの撃退法も想定されるようになる。ほかに、「口裂け女」は「三人姉妹の末妹」であり、「彼女一人だけ整形手術に失敗したため、口が裂けた」という原因説も広く流布した。

このように、「口裂け女」は発生時期から時間が経つにつれ、物語のような複雑性と多様性に富んでいた。この過程に関しては、口承文芸を研究する野村純一の論文「野村一九八四」に詳しく分析されている¹⁾。

(三) 語り手

「口裂け女」の「被害者」「目撃者」とされた小中学生が、実際にうわさを語り広めていったと考えられている。のちに高校生や大学生、大人では主婦なども「口裂け女」物語の伝播に参加したため、結果として社会現象にまで発展することとなる。

さらに、もうひとつ重要な語り手がマスコミである。各週刊誌・新聞は「口裂け女」の噂が各地で流行しているという現象を「報道」する役を担っているが、同時に、これらマスコミが「伝達」役でもあった。

その一方で、「口裂け女」について「書かれた」と呼びうる資料に、彼女の意味意義を考察しようとした研究書・学術書系の論考も存在する。以下の章からは、このような類の先行研究を検討してみたい。

第二章 「口裂け女」の読み方

「口裂け女」を研究した論考は、社会学系統と民俗学・心理学系統とに分けられる。以下では、両者の論調を比較して、結論がどのように変わってくるかを検討する。

(一) 民俗学・心理学的アプローチ

●過去の昔話との比較

民俗学・心理学系統の言説では、まず過去の昔話との共通点を見出す方法が、頻繁に用いられている。「口裂け女」の口が大きく裂けているという外見や、追っかけてくるという物語のモチーフを「喰わず女房」や「三枚のお札」に登場する鬼婆に見立てている。

なかには、産女や山姥、雪女、『記紀神話』のイザナミヤ『四谷怪談』のお岩、と広義に「口裂け女」の範疇に収めている研究者もいる[宮田一九八五]。

●心理学による背景論

深層心理学や精神分析の手法を用いて、「口裂け女」の抽象的な意味合いに迫った研究は、児童心理学を専攻とする秋山さと子を筆頭に、民俗学者の宮田登や小松和彦らによって展開された。

秋山は、「口裂け女」の耳まで裂けた口とは「歯のある子宮」であり、つまり、「子を産む母親のやさしさと残酷さ、性の持つすばらしさ、血なまぐさが隠されている」と分析する[秋山一九八九、三〇頁]。つまり、「口裂け女」は思春期における、少女の性的不安定が生み出した妖怪とする。小松も同じような見方で、「口裂け女」を「歯を持った

ヴァギナ」、「女性器のお化け」と表現している[小松一九八六、二三八頁]。

また、秋山は『週刊朝日』(七九年六月二五日付)では、過保護でかわいがりすぎる母親のもつ否定的な面に、子ども達は無意識に攻撃性を感じて、「口裂け女」を創造したとする意見を載せている。宮田も教育ママの出現によって、子ども達の母親に対する恐怖感が高まり、それが妖怪の形に変身したのが、「口裂け女」であると言う[宮田一九八五、二六頁]。

以上のように、民俗学・心理学的なアプローチでは、以前より語り継がれてきた妖怪との比較から共通点や相違点を明らかにして、「口裂け女」の象徴論的な意味合い、そして彼女を生んだ社会的な背景を問う。このアプローチから導き出された「口裂け女」は、女性器への不安や葛藤、あるいは母親への恐怖の現われであるという結論に達する。この結論は、第三者に「あくまでも、ひとつの解釈に過ぎない」と感じさせる説得力の弱さをもつ。「深読みではないか、大袈裟ではないか。」という読後感を与えてしまうのである。

(二) 社会学的アプローチ

●「口裂け女」という遊び

口裂け女は、妖怪か(中尾)

一般的に、心理学的な読みを回避する社会学者は多い。木下富雄は、民俗学や深層心理学による「口裂け女」の研究方法に対して、「内容の構造化とその主観的解釈などに頼っている」ことを非難した〔木下一九九四、四五頁〕。そうである、自身は実証的データに基づいて、社会心理学の立場から分析していくことを明言する。

木下は一九七九年七月、東京都東村山市と品川区で小学生を対象とした社会調査を試みている。ここで集められたデータを分析し、「口裂け女」に対して、子供たちは不安と好奇心、すなわち「見たし怖し」というアンビバレントな感情を抱いているという結論を導き出している。

また、田原総一朗や東京都内の小学校教諭との対談〔田原ほか一九七九〕の中では、教諭らが集めた小学生からのアンケート結果が報告されている。そこには「怖い」の次に、「会ってみたい」という意見が多く寄せられている。そして、彼らの中には「目立とう精神」で「口裂け女」の登場する話題を率先してしゃべる子や、「仲間外れされることへの忌避感」をもって「口裂け女」目撃談に参加する子がいたことも報告されている。つまり、「口裂け女」は子ども達にとって、恰好の遊びの対象〔中野一九七九、四三頁〕〔木下一九九四、七二頁〕なのである。

以上のように、彼らは「口裂け女」を子供たちのコミュニ

ニケーション・ツールの一つとして扱い、誰から誰に伝わるかという問題に注目する。なぜなら、子どもたちは「口裂け女」を恐れつつも、その存在を信じてはなく、仲間同士で共通の話題を楽しんで連帯感を強めることに目的を置いている、と捉えたためである。

このような動的な側面からのアプローチが、民俗学的研究には欠落していると批判される。うわさやデマを研究している三隅讓二は、各モチーフに対応した異伝を集めて比較する方法に対して、内在的に理解しようとするのではなく、「外在的な行為枠組みとの関連で議論するべきである」と述べている〔三隅一九九九、二三四頁〕。

実際のところ、民俗学者のなかで、中学校教諭の経験をもつ常光だけが、このような子供たちのコミュニケーションの側面を認識している。常光は「口裂け女」やその他の妖怪とは、学校という制度の中で高まってくる緊張を解消するための「文化装置」として機能していると考えている〔常光一九九三、五八頁〕。

● 社会学による背景論

これらの学者たちは、「口裂け女」が誕生した理由を、管理が強い社会へ向けた、子供たちによる無意識的な反動に求めている。

実際、小学校の教師らは生徒たちが、「管理の中からの脱出口としてのヤミの世界に行きたがっている雰囲気」(田原ほか一九七九、三九―四五頁)を抱えていることを感知している。常光も、近年になって怪談が盛り上がりつつあるのは、「子供たちの生活の場から、こうした『こわさ』や『不思議』を実感できる空間と物語が失われつつあることへの裏返しのような気がしてならない」(常光一九九三、六〇―六一頁)と指摘する。

社会学系のアプローチによる「口裂け女」論には、民俗学系・心理学系のような歯切れの悪さはない。論理の流れに整合性を持っていて、それが正しいか否かは別問題としても、読者を納得させる力を有している。

(三) 両研究の相違点

● 接近方法に見られる違い

両研究の違いは、ひとつに「口裂け女」に対する姿勢から生じてくると思われる。社会学的なアプローチでは、「口裂け女」は「うわさ」「都市伝説」研究のひとつとして研究が進められている。ここでは、彼女に対し「妖怪」や「お化け」といった表現はとられず、まれに用いられていても、あくまでも便宜的な用法にとどまり、妖怪といった性格に注目した論理は展開されていない。

一方で、民俗学的・心理学的なアプローチでは、「口裂け女」は「妖怪」であるという見方に疑いは無い。「口裂け女」は「妖怪」であるからこそ、社会的な不満や恐怖が秘められていると考え、それは具体的にどのような社会変化によるものかと思案する姿勢がうかがえる。

これと関連して、両者の間には「口裂け女」出現に現代なりの理由が求められるか否か、が大きな焦点になっている。木下はお化けなどを怖いと感じつつも、会ってみたいとする心理は昔からあるので、「抑圧された現代社会、管理の強い子供の反発といった、現代特有の心理には求められない」(木下一九九四、七九頁)と決めつけている。

他方で、小松和彦は「突然に都市に出現した『口裂け女』の場合、現代固有の出現理由があったに違いない。」と断言している(小松一九九四b、三四二頁)。

小松にとつて妖怪研究の意義とは、「妖怪を通した人間研究」にある(小松一九九四a、一一頁)。妖怪とはその時代時代の人間や社会を投影させたものであるから、妖怪の特徴や変化から当時の社会の裏に潜む、人間の不満や不安を読み解く方法は可能であると説く。だからこそ、過去の妖怪との比較を通じて、現代なりの人間の心象を掴み取るという意欲のもとで、「口裂け女」現象は読み解かれた。

口裂け女は、妖怪か(中尾)

●なぜ「私きれい?」と問うのか

次に、マイケル・フォスターの研究「フォスター二〇〇三」を中心に、「美」というテーマに焦点を当てて、両研究の差異を考察していきたい。彼は子供ではなく大人の立場からの読み直しをほかり、女性週刊誌という語りの場に注目した。

フォスターは「口裂け女」の重要構成である、女であること、耳元まで裂けた口、「私きれい?」の問いかけ、マスクをしている、という四つの特徴を、ジェンダー、セクシュアリティ、美、反抗といった四つの抽象概念で解釈する。紙面の関係上、本稿では後者の二点について検討したい。

「口裂け女」が多く取り上げられたメディア媒体である女性週刊誌は、化粧品や整形手術の広告を積極的に掲載している。これは言い換えれば、女性は美しく変身することで社会的な力を得ることができると、男性社会が暗示している場であると解く。このようなコンテキストのなかで、「口裂け女」は「私きれい?」と問うた後に裂けた口を曝すことで、美を要求する社会への反論、見かけの良さで価値が決まる社会への反発の声を上げているとする。「フォスター二〇〇三、六三九頁」。この指摘は、小松も同意見である。

小松もフォスターも両者ともに、「口裂け女」が女である点を特別視しているようである。これは、妖怪研究の文脈において、女性は男性よりも象徴論的に重要視されている

ことに起因すると考えられる。

一方、社会学者・木下の論考における、「美」に関する意見を概観してみる。木下は「口裂け女」に女が多い理由として、以下の三点を挙げている。第一に、美から醜へ変化するという演出には、外見的な美を判断基準にしたがる女の方がより効果的となるため。第二に、口という武器は女だからこそ有力であるため。最後に、どこまでも追っかけてくるというイメージは女性の方が強い。「口裂け女」の中心的テーマ、美から醜への突然変化と、逃走・追跡という仕掛けという条件を満たしていれば、上記三点は必ずしも必要ではなく、「口裂け女」は女でなくてもよい「木下一九九四、八一頁」という見方を示す。

彼が背景論に深い立ち入らない姿勢をとるとしても、これはあまりにも読みが足りない。「口裂け女」が女であった理由は看過されるべきではない。この点に対して、ひとつの論理的な解答を明示できたのは、妖怪研究の先に「口裂け女」を論じたフォスターであった。

木下ら社会学者は、うわさの社会を反映する性質と、うわさからその社会背景を明らかにする方法は容認している。しかし、「口裂け女」を生んだ土壌に関して、一歩進んで具体的に発言することには、とくに人間たちの心的な領域に踏み込むことは、かたくななまでに拒絶する。

第三章 口裂け女は妖怪か

(一) 根本的な疑問へ

ここまで第二章にわたって「口裂け女」に関する先行研究を概観してきた。民俗学・心理学的方法のように、妖怪研究のひとつと前提して取り組めば、たんなる「解釈論」にとどまり、筋道が不確かになりがちである。一方、社会学のように、現象の背後まで深く掘り下げて読むことを避けて、コミュニケーション面に焦点を絞れば、論理にある程度の説得力を持ちうる。そのためには、「口裂け女」は妖怪であるという点へのこだわりを捨てればよい。ここに至って、「口裂け女は妖怪か」という本論の題目に行き着く。そもそも、民俗学系統の研究者たちは、なぜ「口裂け女」を妖怪とみなしたのか。「妖怪」とは、いったい何なのか。「口裂け女」を妖怪と設定することで、何が明らかになるのか。

(二) 対母親ではない恐怖

母親恐怖説に関して、木下から反覆する調査結果「木下一九九四」が提出されている。木下は小学生に、「口裂け女」と「オバケ」「人さらい」「怪獣」「母親」に対して感じているイメージを、「明るいー暗い」、「真面目なーユーモアのある」や「安全ー危険」といった、全一項目による相反した感

情のどちらと近いか質問している。ここで木下が得た結論とは、「口裂け女」は「早くて冷たくて、興奮して強い、また暗くて醜く残酷、危険で悪い」といったイメージに集約され、母親のそれとは程遠く、「ひとさらい」に近いというものである。

それでは、なぜ民俗学者や心理学者らは、「口裂け女」から性的な要素を抽出して、「母親」と結びつけたのか。それは大人の物差しから子ども心理を讀もうとしたからであり、これは転じて、当時の大人たちが性的な話題に関心を示していたことを明らかにしているではないか、と木下は解釈する。

(三) 遊び説への反論

「口裂け女」を「子供たちの遊び」であると、社会学者たちが分析していることは前にも述べた。小学生のときに、実際に「口裂け女」を聞いた筆者としては、この説は素直に受け入れがたい。たしかに、「口裂け女」の存在は半信半疑であった。しかし、「口裂け女はいない」という発言は、大人に対して強がって発せられた感もあり、その一方で「もしかしたら、今日帰り道で……」という恐怖感により強いアリティを抱いていたように記憶している。これは聞き手・語り手が幼少の者であれば、共有できる感覚ではないだろ

口裂け女は、妖怪か(中尾)

うか。当時から「大人」であつた先学諸氏には、子供にとつての「道端の恐怖感」など実感できないのである。

この実体験から、筆者としては「口裂け女」とは、何らかの恐怖心の具現であるという前提は捨てきれない。

小松和彦は「妖怪」を、人々の恐怖や不安に結びついた超絶的現象・存在であると定義している[小松一九九四、三九頁]。「口裂け女」が母親に対する恐怖ではないとすれば、どのような恐れを具現した妖怪なのだろうか。

「口裂け女」は「ひとさらい」に近いという木下の調査結果と、先述した筆者自身の実体験を交えて、「通り魔」への恐怖心が、社会には蔓延していたのではないだろうか、という仮説を筆者は立てている。道端で得体の知れない何者かに出会うかもしれない怖さ、もしかしたら殺されてしまうかもしれない恐れ、これは現実存在する「通り魔」に対する感情であり、また「口裂け女」の話に通底している恐怖心と重なるものがある。

「通り魔」への恐怖と絡めて、「口裂け女」を論じた者は少ない。心理医学者の中村希明が、「口裂け女」が七九年前後に起こつた「通り魔事件」の予告であつたと簡単に触れているぐらいである[中村一九九四、一九四頁]。

結語 今後の研究に向けて

木下によれば、母親恐怖説は大人の問題意識を反映しているという。この見方をやや転換すれば、木下の新解釈は大人たちが、「口裂け女」を受け入れた理由として成立する。しかし彼は、民俗学者や心理学者に認識の甘さを攻撃するだけにとどまって、大人にとつての「口裂け女」の意義まで追求しない。

民俗学・心理学的研究の欠点は、「口裂け女」が何に対する恐怖なのか、子どもたちから直接得た意見による考察を怠つたこと、どのような場でどのようにして語られていたのか、行爲的な側面への注目が欠けていたこと、に求められる。また、何をもって妖怪とみなすのか、妖怪とは何かといった点を、前もって明示せずに論じ始めたために、議論を曖昧にしたところもある。

筆者が今後とりうる方向は、他時代の「通り魔」との比較から「口裂け女」を再検討することにある。このような問題設定をしたうえで、次に浮かぶ疑問は、「通り魔」という通時的に発生しうる一般的な恐怖像が、なぜこの時代では「口裂け女」という名前をまとつたかである。なぜ「口裂け女」という物語を、我々は生み出したのか、そして受け入れたのか。そこには、子供たちが「口裂け女」を生み出した背景、大人たちまで巻き込んだ背景、「口裂け女」が女で

あつたことの意味、彼女が「私、きれい？」と問うた意義が、あらたな意味をもたつて浮かび上がってくるに違いない。

注

(1) 以下の論文で指摘されている。また、七九年以前の週刊誌や新聞では、「口裂け女」の語句が登場しない。

「赤塚一九九〇」、「岩崎一九九〇、一九頁」、「田原ほか一九七九、三二頁」、「常光一九九三、三八頁」、「野村一九八四、一六頁」、「フォスター二〇〇三、六三五頁」、「宮田一九八五、二六頁」。

(2) 以下の論考に記載されている。同じことは一九七九年当時の週刊誌・新聞でも、すでに言及されている。

「小松一九八六」、「綱淵一九九〇」、「野村一九八四、一九八九」。

(3) 以下の週刊誌に記載されている。

『週刊文春』(一九七九年六月二八日号)、『週刊女性』(一九七九年七月三日号、三二―三三頁)、『女性自身』(一九七九年七月五日号、六〇―六一頁)、『週刊ポスト』(一九七九年七月六日号)、『微笑』(一九七九年七月十四日号)。

(4) 野村は昭和五六年、五七年、五八年の三年に渡って、日本各地の卒業する女子高生から「口裂け女」の話を集めた結果、二・三年目に入って、当初は無かった主人公の位置づけ(赤いマントを羽織っている、髪の毛長い色白美人、三人姉妹の末

妹)がなされ、「口裂け女」が具象化され特定化されたことを発見した。

また、「口裂け女」が手にする刃物がナイフや剃刀の日常的な品物から鎌へと変容したこと、撃退方法や殺害を逃れる方法が、昔話の「喰わず女房」「牛方山姥」などの逃避譚のモチーフと類似していったことも導き出している。以上のような変化から、野村は「口裂け女」話が時の経過とともに、先行する昔話への類似化の道を進んだと考えた。

(5) ほかに、過去の説話等に類似性を見出す研究者は多い。歴史小説家の綱淵謙錠や宗教民俗学者の五来重、心理医学者の中村希明らの論考を参照。

(6) 社会学者らは「口裂け女」現象を扱う際に、「うわさ」「デマ」「都市伝説」という語句を区別せずに使っている節がある。これらの用語は厳密には異なる意味を持ち、あらかじめ定義してから使用するべきである。

(7) 裂けた口は男にとって去勢への恐怖、女にとって自己のセクシュアリティへの恐怖と不安を象徴していると解く。また、マスクは、反社会性や危険を表明し、アイデンティティを不透明にしている。

(8) 「口裂け女」は現代社会の醜い女に対する嫌悪と、そう呼ばれることへの不安が生み出した形象といえる。「小松一九八六、二三二頁」と、彼は考察している。

(9) フォスターは、「口裂け女」が消えた理由まで探求したという点でも評価できる。七〇年代に中ピ連(中絶禁止法)に対しピル解禁を要求する女性解放連合の略)などの女性運動が盛んであったところに、「口裂け女」は颯爽として現われ、八〇年代、「女性学」が到来し女性運動が一段落すると、「口裂

口裂け女は、妖怪か(中尾)

け女」がその役目を終えて姿を消したのではないかと彼は述べている。

なお、「口裂け女」の終焉に関しては、マスコミに「実際に」登場してしまつてから、大衆が白けてしまったとする見解が多い「中野一九七九、四三頁」。一九七九年六月、姫路市内で「口裂け女」を真似たメークをした女性が、警察に連行されたことがあつた。この事件が報道された日(『週刊女性』八月七日号や『週刊読売』八月二日号)を境に、「口裂け女」の記事は激減したという。

(10) ただし、この木下の調査結果が正当性を持つていられるかどうか判定しがたい。なぜなら、秋山や宮田の主張する母親への恐怖とは普段は隠されている母親のマイナスマ面を指し示し、日常に子供たちが抱いている母親像と正反対であるのならば、「口裂け女」は「反」母親として成立させることも可能であり、かえつて、これらの主張を裏付ける証左ともなりうるからである。

(11) 筆者が「口裂け女」と出会つたのは、一九九〇年代初頭にあたり、本論で問題にしている一九七九年頃ではない。しかし、「口裂け女」は「再帰性の噂」であることが一般に理解されているので、問題ないと解した。「再帰性の噂」とは、同じ噂がある一定の間隔を置いて、繰り返し伝えられる噂話である(木下一九九四)。

(12) 宮田登が八〇年代の都市型犯罪として、犯人と被害者との関係が薄い傾向があると指摘したうえで、「通り魔」について言及しているが、「口裂け女」と関連づけて述べられているわけではない(宮田一九八五)。

週刊誌・新聞記事(発行日順)

『岐阜日日新聞』

一九七九年一月二六日号、一面

『週刊朝日』

一九七九年三月二三日号、三五―三六頁

『週刊新潮』

一九七九年四月五日号、一二八―一二九頁

『スポーツニッポン』

一九七九年五月二一日付、一五面

『微笑』

一九七九年六月一六日号、三五―三七頁

『読売新聞』半村良「口裂け女のうわさ」

一九七九年六月一八日付け夕刊、九面

『朝日新聞』秋山さと子「口裂け女」と少女心理」

一九七九年六月二五日付、一五面

『女性セブン』

一九七九年六月二八日号、六二―六三頁

『週刊文春』

一九七九年六月二八日号、三二―三四頁

『週刊朝日』

一九七九年六月二九日号、一六一―二〇頁

『週刊女性』

一九七九年七月三日号、三二―三三頁

『女性自身』

一九七九年七月五日号、四六―四八頁

『週刊ポスト』

一九七九年七月六日号、四〇―四三頁

『朝日新聞』

一九七九年七月一〇日付け夕刊、七面

『微笑』

一九七九年七月一四日号、二三四―二三九頁

『週刊女性』

一九七九年八月七日号、三〇―三二頁

『週刊読売』

一九七九年八月一二日号、一三七頁

参考文献

赤塚行雄

一九九〇 「昭和のヒーロー」三五 「口裂け女」『文藝春秋』

七月号、三三〇―三三二頁

秋山さと子

一九八九 「噂話の深層心理」『言語』十八卷一二号、二八一―

三三三頁

朝倉喬司

一九八九 「あの『口裂け女』の棲み家を岐阜山中に見た！」

『別冊宝島九二 うわさの本』所収、一三二―

一四九頁、JICC出版

池田香代子ほか編

一九九六 『走るお婆さん―日本の現代伝説』白水社

石毛拓郎

一九七九 『『口裂け女』と詩の退却現象』『新日本文学』

八月号、九六―九九頁

岩崎真幸

一九九〇 『『口裂け女』資料』『磐城民俗』二七号、一八一―

二五頁

木下富雄

一九九四 「現代の噂から口承伝承の発生メカニズムを探

る」木下富雄編『記号と情報の行動科学』所

収、四五―九七頁、福村出版

小関三平

一九七九 「水がめ座からきたインベーターか」『月刊教育

の森』四卷九号、四六―五三頁、毎日新聞社

後藤明生

一九九〇 「噂の構造」後藤明生編『日本の名随筆九五噂』

所収、二二九―二三五頁、作品社

口裂け女は、妖怪か(中尾)

小松和彦

一九八六 『口裂け女の意味論』『鬼の玉手箱―民俗社会の

交感』所収、二二七―二四〇頁、青玄社

一九九四 a 『妖怪学新考―妖怪から見る日本人の心』小学

館

一九九四 b 『魔と妖怪―宮田登ほか』『日本民俗文化体系四

神と神仏』所収、三三九―四一四頁、小学

館

五来重

一九八四 『喰わず女房』と女の家『鬼むかし』所収、

七一―八九頁、角川書店

高橋敏弘

一九八九 『怪異雑考』『西郊民俗』一二六号、二七―二九

頁

田原総一朗ほか対談

一九七九 『なぜ風説』『口裂け女』が走ったか』『月刊

教育の森』四卷九号、三二―四五頁、毎日新

聞社

綱淵謙錠

一九九〇 『口裂け女』異聞』後藤明生編『日本の名随

筆九五 噂』所収、一四三―一五二頁、作品

社

常光徹

一九八九

『子どもと妖怪―学校のトイレ空間と怪異現象』
岩本通弥ほか編『都市民俗学へのいざない』
所収、四一―五七頁、雄山閣

一九九三

『学校の怪談―口承文芸の展開と諸相』ミネル
ヴァ書房

中野収

一九七九

『遊び』を死滅させる文化―『口裂け女』の
徘徊』s』六月号、四二―四三頁、ポララ文化
研究所

中村希明

一九九四

『口裂け女の系譜―ルーマーの社会病理学』『怪
談の心理学―学校に生まれる怖い話』所収、
一七五―二〇四頁、講談社現代新書

野村純一

一九八四

『話の行方―『口裂け女』その他』川田順造・
徳丸吉彦編『口頭伝承の比較研究』所収、
二―二九頁、弘文堂

一九八九

『口裂け女』の生成と展開』『言語』一八卷一
二号、四八―五三頁

久野俊彦

一九九九

『高校生が知っている不思議な話』『下野民俗』

三九号、四〇―五四頁

廣井脩

一九九〇 「とびかう「うわさ」の考現学」『月刊現代』五月号、三〇六―三一五頁

フォスター、マイケル

二〇〇三 『私、きれい?』—女性週刊紙に見られる「口

裂け女」小松和彦編『日本妖怪学大全』所収、六三五―六六七頁、小学館

深作光貞

一九七九 「常に消えない日本人のアニミズム」『口裂け

女』が駆け回った裏で『月刊教育の森』四卷九号、二四―三一頁、毎日新聞社

堀亨

一九九〇 「デマと伝説」後藤明生編『日本の名随筆九五

噂』所収、二一一―二二八頁、作品社

本田碩考

一九八六 「尾崎の『口裂け女』伝承」『鹿児島民俗』八四

号、四二―四四頁

松谷みよ子

一九八七 『現代民話考七 学校』立風書房

松田美佐

一九九九 「噂研究から噂を通じた研究へ」佐藤達哉編『現

三隅讓二

一九九〇

「都市伝説―流言としての理論的考察」佐藤達哉編『現代のエスプリ別冊―流言、うわさ、そして情報』うわさの研究集大成』所収、一一―一五六頁、至文堂

宮田登

一九八五

「口裂け女と産女」妖怪の民俗学―日本の見えない空間』所収、二六―三九頁、岩波書店

(本学文学研究科地理学専攻博士課程前期課程)